

閉会に先立ち、優秀発表賞の発表と授与が行われた。受賞者は以下の8件である(発表番号順)。

1. パルスNMR法、及びSAXS法によるパーフルオロスルホン酸ポリマー中クラスター構造解析(旭硝子) 関 庚薫氏
2. 表面増強赤外吸収現象を利用した顕微ATR法による高分子材料表面の高感度分析(豊田中研) 須藤栄一氏
3. マルチモードSPMを用いた多層薄膜のナノ表面解析(コニカ) 松田敦子氏
4. ポリエチレンオキサイド-ポリプロピレンオキサイドブロック共重合体ジメタクリレートの構造解析(日立化成) 海野晶浩氏
5. マトリックス支援レーザー脱離イオン化質量分析法による微生物中のタンパク質および脂質成分の迅速分析(名大) 石田康行氏
6. サイズ排除クロマトグラフィー法によるパーフルオロスルホン酸ポリマー溶液のキャラクタリゼーション(旭硝子) 川原健吾氏
7. 化粧品に配合されるカチオン性高分子の定量・分子量測定法(ライオン) 杉山淳一氏
8. 半導体リソグラフィー用樹脂の末端基構造解析(三菱レイヨン) 百瀬 陽氏

来年の開催場所は未定であるが、実用的な高分子分析を討論する貴重な場として定着してきており、第7回の討論会に参加・発表されるようお願いいたします。また、講演要旨集に残部があり、実費(3,000円)にてお分けしておりますので、大谷肇幹事委員長(hajime@apchem.nagoya-u.ac.jp)までご一報願います。

(旭硝子株式会社 米森重明)

### 第311回高分子分析研究懇談会

標記例会が、2001年12月4日に簡易保険会館「ゆうぼう」とにおいて、約45名の参加者を得て開催された。最初は、長年塗料開発の基礎的検討に携わってこられた坪内健治郎氏(関西ペイント)により「ガスクロマトグラフィーによる樹脂の溶解性パラメータの推定」と題する講演があった。溶媒同士や高分子/溶媒間の溶解性を予測する指標として身近なパラメーターである溶解性パラメーター(SP値)を、高分子を固定相液体とした気-液分配ガスクロマトグラフィーを利用して求める方法、及びSP値への極性基の効果について具体的な実例を挙げて解説された。基本特性である樹脂のSP値の実験的決定と極性基の影響について大変参考となった。

続いてワークショップ2件の報告があった。1件目は佃 由美子氏(アクトリサーチ)より「平面スライス法を前処理として用いるdepthプロファイルの解析:樹脂組成物の劣化プロファイル」と題する報告であった。滑走式マイクロトームを用いて3~5 $\mu\text{m}$ 厚の平面に平行な薄片を厚み方向に調整し、赤外、熱分解GC/MS、UV等(必要に応じ他の分析手法の適用も可)による各種特性の深さ方向プロファイル観察に関する報告であった。深さ方向分布を得るためのサンプリング手法としてよく用いられる深さ方向への断面スライス方法と比較した優

位性について述べられた。2件目は戸田芳子氏(旭化成)より「 $^{29}\text{Si}$ -NMRを用いたアルキルアルコキシシランの重縮合の評価」と題する報告であった。反応速度の速い核重縮合過程を忠実にかつ直接観察する手法として、Si-NMRの有効性について報告された。これらワークショップの報告は、従来の一般的手法を用いてはわからなかったことを明らかとするため、視点を変え複合的観点から分析手法を組み立て各種困難を乗り越えた実例であり、柔軟な複眼的思考の重要性を痛感した。

最後に古川行夫氏(早稲田大学)より「赤外分光法による共役高分子デバイスの研究」と題する講演があった。有機半導体を利用した電子デバイスの開発に必要な有機物の構造やキャリア、エキシトンに関する情報が*in situ*赤外反射吸収分光測定により得られることについて、測定法を含め豊富な実例を挙げて解説された。電場誘起赤外スペクトルより発光ダイオードや電界効果デバイスの注入キャリアに関する情報が得られることを述べられ、赤外分光法の応用について再認識させられた。

各講演の後には活発な質疑応答が行われ、続く交流会では軽食を交えて会員相互や講師の先生方との間で懇親を深め、盛況のうちに第311回例会は終了した。

(リケンテクノス株式会社 箕島 亘)

### 2001液体クロマトグラフィー研修会 (LC-DAYs 2001)

2001年12月3日・4日に、勸学大学セミナーハウス(東京都八王子)において標記研修会が日本分析化学会液体クロマトグラフィー研究懇談会の主催により開催された。液体クロマトグラフィー関連の宿泊を伴う研修会はここ数年開催されておらず、当初の参加者50名の予定が予想を超え、最終的には83名の参加があり、大きな会議室がほぼ満席となった。

最初に開会の挨拶が中村 洋実行委員長(東理大薬)により行われた。セッション1の「LCの最新動向」として、杏名裕氏(資生堂)の「シリカ系カラム開発の最新動向」、鈴木廣志氏(昭和電工)の「ポリマー系カラム開発の最新動向」、古野正浩氏(ジーエルサイエンス)の「前処理器材開発の最新動向-固相抽出法を中心として」および牧野成夫氏(ダイセル化学工業)の「分取LCの最新動向」の各発表があり、各分野の最新技術を含め、わかりやすく説明が行われた。続いてセッション2のLCバトルコーナーとして「市販固相抽出用器材の評価」、「市販ODSカラムのランキング」、「市販試薬・溶媒の評価」および「市販MS装置の実力と評価」の4題目で、4社から7社が参加し自社製品の特徴・利点を競い、ユーザー側としてはほかでは聞けない内容が多く盛り込まれていた。特にODSカラムのランキングでは聴講者によるランキング投票が中止になるぐらい白熱した討論が交わされた。

懇親会が18時に開催され、中村委員長の挨拶から始まり、キラルカラムでご活躍された大井尚文による乾杯の音頭で宴が始まった。本研究懇談会編集の『液クロ虎の巻』の出版元である筑波出版会の花山 亘氏の挨拶があり、液虎の売り上げも出だしとしては好感度であると報告された。二次会は大学セミナーハウス内の交友館で盛り上がった。参加者の多くは「懇親